福岡大学先端経済研究センター ワーキング・ペーパーシリーズ

『草枕』の構造

山﨑　好裕

福岡大学経済学部

WP-2025-003

福岡大学先端経済研究センター

〒814-0180　福岡県福岡市城南区七隈八丁目 19 番 1 号

『草枕』の構造

山﨑　好裕

概要

『草枕』は夏目漱石の初期の代表作である。漱石は英語教師として熊本・松山で教えた。小説は漱石が熊本滞在中に小天町を訪問したときの経験を元に創作された。

漱石は東京に生まれ育って地方で仕事をしたこともあり、中央・地方という対立軸を内面に持っていた。また、イギリス留学で精神の危機に陥るなど、日本と西洋という対比にも敏感であった。そうした内面が同時代の日本人と共通であったために彼の作品はよく読まれたのであろう。

本稿では計量テキスト分析の手法を用いて『草枕』という小説の構造を明らかにしていく。それは、主観・認識という内面的な世界に生きる主人公が地方の人々や女性と触れ合うなかで客観・知覚の世界へと解放されていく物語という構造を持っている。

また、小説にはかつて自由民権運動の盛り上がりを担った熊本の地主層の当時の状況が描かれているという点でも歴史的資料としての価値を持っている。

JEL 分類番号：B190、C510、N950。

キーワード：夏目漱石、計量テキスト分析、小説、明治時代、自由民権運動。

The Structure of Sohseki Natsume's Novel "Kusamakura"

Yoshihiro Yamazaki

Abstract

The novel "Kusamakura" is one of the most important works in the early stage of Sohseki Natsume. Sohseki had experiences of living in Kumamoto and Matsuyama as an English teacher. The novel was written based on the memory of his visit to Oama Village, Kumamoto Prefecture.

Sohselo's mind kept the two axes of center and periphery because he was born and raised in Tokyo and worked in the local areas. He also studied in the UK to suffer from a mental disease. His soul was sensitive to the comparison between Japan and the West. As the contemporary Japanese people shared the same mentality as Sohseki, his works became very popular.

This paper makes clear the structure of "Kusamakura" through statistical analysis of text. The novel has the structure that the protagonist who lives in the world of subjectivity and understanding liberalizes himself into the world of objectivity and perception by the experience of communicating with local people and the lady.

In addition to that, the novel has a big value as a historical record in that it describes the contemporary situation of landlords in Kumamoto who used to be main activists of Liberty and Civil Right Movement.

JEL classifications: B190, C510, N950.

Keywords: Sohseki Natsume, Statistical Analysis of Text, Novel, Meiji Era, Liberty and Civil Right Movement.

はじめに

『草枕』は夏目漱石初期の代表作とされている。新聞連載の小説家であった漱石は読者の要請に応じて作風を大きく変化させていった。それは初期の戯作小説めいた滑稽文学から後期の自然主義的な文学へというものだったと言っていいだろう。『草枕』はそうした漱石の初期段階の終着点と言えるのである。

小説はもちろん読まれるものである。また、作者も読者が読むのと同じ順番で言葉を置いていく。このような当たり前の読み方でわかるのはストーリーであったり、その背後にあると想定される主題といったものであったりする。だが、そうした読み方は正当なものである分だけ作者の無意識的な創造性というものを全て切り捨ててしまう恐れがある。

本稿で追っていこうというのは、そのように作者自身にも自覚されていないであろう小説の構造といったものである。無論そのような構造は通常の読みでは摘出できない。通常の読み方をすると読み手の主観が小説のストーリーや意味するところを追ってしまわざるをえないからだ。だから、構造の解析には主観を排除した客観的な読みが可能な手法を必要とする。

そうした手法として本稿が採用するのは計量テキスト分析である。計量テキスト分析は数理統計的な手法を文章解析に適用した分析方法である[1]。計量的宇土文責は、客観的に語彙を分析することで語彙間の繋がりを明らかにする。しかも、それは純粋に機械的に行われるので読解に主観が入り込むことはない。

『草枕』は漱石が熊本に滞在中に小天村を訪れたときの実体験が元になった創作である。東京生まれの漱石は英語教師として熊本と松山に滞在した。また、国費留学生としてロンドンでも生活している。こうして漱石の内面には東京と地方、日本と西洋という対立軸が形成されたことが見て取れる。そのような対抗関係もまた『草枕』の小説構造に反映していることが本稿の分析で明らかになるだろう。

また、こうして漱石の内面に形成された対立軸は、明治時代日本の中央と地方の関係や日本と西洋の関係を反映したものである。だから、『草枕』を素材にした構造分析を行うことは、漱石という小説家の主観を通じた明治日本の社会経済構造の分析にもなっているのだということを確認しておきたい。

また、『草枕』という作品一つとっても、小説というものの読み方は多様であってよい。それに本稿の分析も多様な分析の一つにすぎない。しかし、これまで文学研究者によって試

---

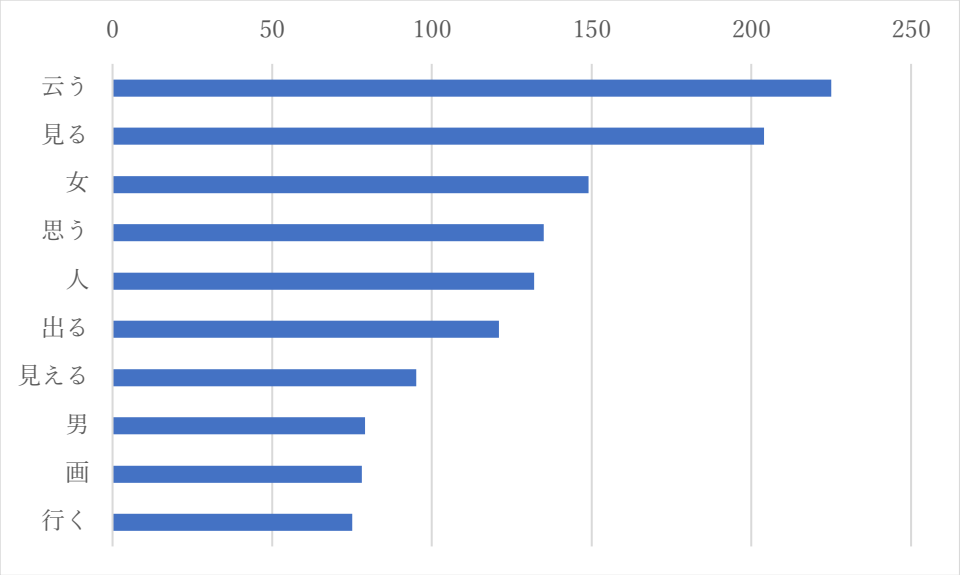
[1] 分析には KH Coder というフリーウェアを用いている。KH Coder のウェブサイトからはそのチュートリアルもダウンロードできる。そのチュートリアルで分析例に挙げている素材が何と夏目漱石の『こころ』なのである。漱石後期の人気作が取り上げられているのは単なる偶然であるが、本稿での『草枕』の分析は計量テキスト分析の適用例として極めて興味深いものとなるだろう。

みられなかったという意味で、本稿の分析には極めて重要な論点の提示が期待できるのである。

1. 頻出語から見る『草枕』の特色

まずは大きな見取り図を得るために『草枕』全体を通した頻出語のリストを確認してみよう。図 1 には上位 10 位までの頻出語を並べてある。

図 1　『草枕』の頻出語



9 番目に「画」が入っているのは主人公の「余」が絵描きだからである。また、「女」と「男」という語がリストに見られるのは読んだ人なら誰にもわかるように小説の雰囲気を十分に表現していると言えよう。

本稿の分析にとって重要なのは「云う」、「見る」、「思う」、「出る」、「見える」、「行く」の存在である。他はこの後見るとして、まずは 225 回現れる「云う」についてその代表的な用例を見ておきたい。

> 西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛の愁などと「云う」字がある。詩人だから万斛で素人なら一合で済むかも知れぬ。(一)

> 何でも白髪という字を入れて、幾代の節と「云う」句を入れて、馬子唄という題も入れて、春の季も加えて、それを十七字に纏めたいと工夫しているうちに、「はい、今日は」と実物の馬子が店先に留って大きな声をかける。(二)

自から不幸の輪廓を描いて好んでその中に起臥するのは、自から鳥有の山水を刻画して壺中の天地に歓喜すると、その芸術的の立脚地を得たる点において全く等しいと「云わ」ねばならぬ。（三）

十七字が容易に出来ると「云う」意味は安直に詩人になれると「云う」意味であって、詩人になると「云う」のは一種の悟りであるから軽便だと云って侮蔑する必要はない。（三）

うららかな春日が丸窓の竹格子を黒く染め抜いた様子を見ると、世の中に不思議と「云う」ものの潜む余地はなさそうだ。（三）

淡しとは単に捕え難しと「云う」意味で、弱きに過ぎる虞を含んではおらぬ。（六）

漲ぎり渡る湯煙りの、やわらかな光線を一分子ごとに含んで、薄紅の暖かに見える奥に、漾わす黒髪を雲とながして、あらん限りの背丈を、すらりと伸した女の姿を見た時は、礼儀の、作法の、風紀のと「云う」感じはことごとく、わが脳裏を去って、ただひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思った。（七）

「云う」はもちろん普通に「言う」の意味でも使われてそれ故に最頻出語となっているのだが、ここにあえて引用した文では表現を婉曲にするために使われている。「～の字」と言えば済むところをわざわざ「～と云う字」という風に言っているところを婉曲と言っているのである。

これは漱石がこの小説の中で漢籍、西洋絵画、俳句などの知識をふんだんに披歴していてそれだけだと鼻持ちならない感じになりそうなところを、「云う」で暈すことで読者に受け入れやすくしているといった気分なのだと思う。また、この「云う」の多様こそが『草枕』という小説が持っているどことなく駘蕩とした雰囲気に繋がっているのではないであろうか。

2 番目の頻出語である「見る」も 204 回と、「云う」と並んで 3 位以降に差を付けて多く出てくる。これも特徴的な用例を引用しておこう。

行く手は二丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを「見る」と、登ればあすこへ出るのだろう。（一）

軒端を「見る」と青い煙りが、突き当って崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでいる。（二）

仰向に寝ながら、偶然目を開けて「見る」と欄間に、朱塗りの縁をとった額がかかっている。(三)

ところがこの女の表情を「見る」と、余はいずれとも判断に迷った。(三)

寝返りを打って入口を「見る」と、因果の相手のその銀杏返しが敷居の上に立って青磁の鉢を盆に乗せたまま佇んでいる。(四)

刻々と逼る黒き影を、すかして見ると女は粛然として、焦きもせず、狼狽もせず、同じほどの歩調をもって、同じ所を徘徊しているらしい。(六)

古代希臘の彫刻はいざ知らず、近世仏国の画家が命と頼む裸体画を「見る」たびに、あまりに露骨な肉の美を、極端まで描がき尽そうとする痕迹が、ありありと見えるので、どことなく気韻に乏しい心持が、今までわれを苦しめてならなかった。(七)

主人公の「余」は全く以って見る人である。彼は目そのものであって肉体を持たない。彼は見ることに専念して行動を起こさないのである。

たとえば、那美が裸で浴室に姿を現したときにも「余」は男性としての行動を起こさない。ただ、その裸体を見るだけである。この意味で『草枕』は甚だ見る小説だということである。東京から来た「余」が地方の有り様を見る。そして、彼は決して手出しをしない。まるでそれが禁じられているかのように。

2.『草枕』の語彙の繋がり

前章では『草枕』に登場する語彙を頻出度順に確認した。本章ではそれら語彙の間の繋がりを考えてみよう。

図 2 では語彙ごとの丸の大きさで頻出度を、語彙の丸を繋ぐ直線によって語彙同士の結び付きの強さを表している。また、実線の方が点線より結びつきが強い。

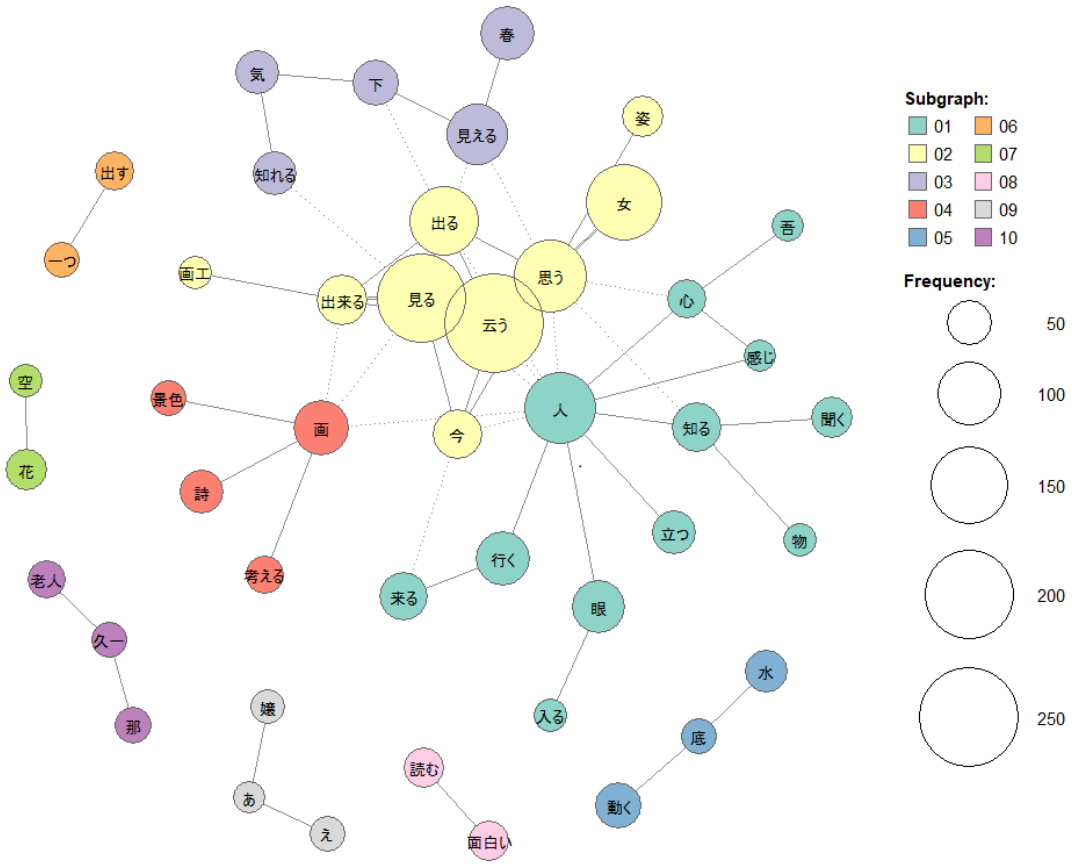
まず、真ん中の辺りに前章で見た「云う」と「見る」の大きな丸が重なり合って存在している。その周りには「思う」、「今」が直線で結び付き、さらに「女」や「姿」が繋がる。そして、この塊が「画工」と結び付いている。このことが示すのは「云う」や「見る」の主体が主人公の「画工」であることを示し、主人公が「女」の絵を描きたいと思っていることを表している。

また、この主人公の主観を意味する塊が対峙しているのは「人」を中心とする塊である。

この「人」が主人公自身に対して他者であることは「人」が「行く」、「来る」、「立つ」、「知る」などの語と繋がっていることからわかる。「吾」が他者たちの言葉を「聞く」ことによって他者の「心」を「知る」ことになるからである。

また、主観の塊の「出来る」から「画」に線が繋がっていて、それが「景色」、「詩」、「考える」に結び付いている。だから、この「出来る」は画題ができるということであって、それがしばしば「景色」を見て考えたり、「詩」を読んで発想したりすることの現れである。

図 2　『草枕』の共起ネットワーク



同じく主人公の主観の塊から線が繋がっているのが、「見える」、「知れる」、「春」、「下」、「気」の塊である。注目したいのは「見る」、「知る」に対して「見える」、「知れる」という受動的な表現になっていることである。

これは主人公の「見る」、「知る」という能動的な振る舞いに対して、「見える」、「知れる」という受動的な場面や側面が存在しているということである。それは「春」の景色に触発されて画題が自ずと生まれてくるということかもしれないし、何か「気」のようなものが作用しているのかもしれないのである。

3．『草枕』の語彙の対応関係

本章では対比関係にある最も反対の語彙間の距離が最も遠くなるような軸を考え、それと直交する軸とで作られる四つの象限に語彙を配置することを考える。また、『草枕』は一から十三までの 13 章からなるが、その漢数字の番号もグラフ上に記してある。つまり、その章番号を見ることで、特徴語の観点からそれぞれの章の特徴を探ることができるのである。

図 3　『草枕』の対応分析

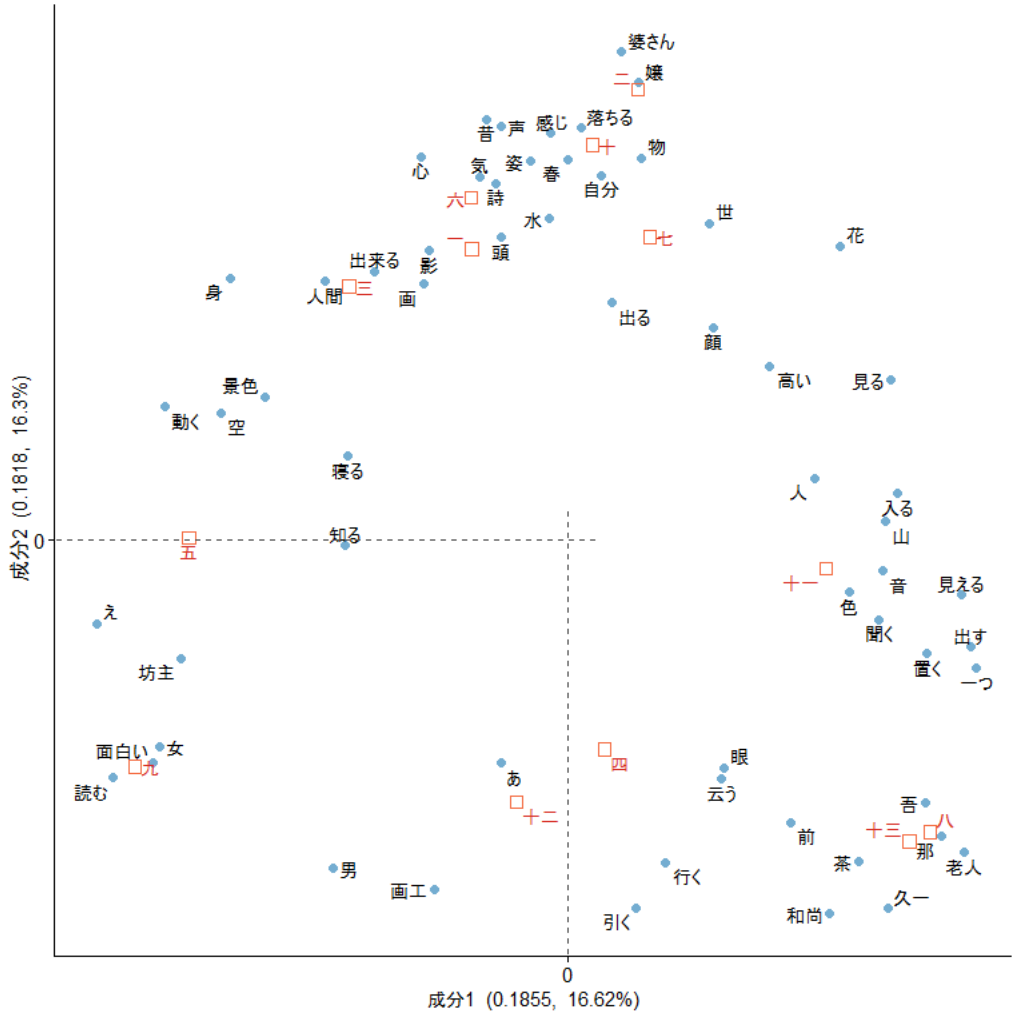


図 3 からわかるように原点近辺には語彙が全く存在しない。原点近辺にあるのは特徴のない語彙であるから、『草枕』の場合、それぞれの章に出てくる語彙に特徴が際立っているということである。

さて、横軸の原点より右には「見る」や「見える」、「聞く」などの感覚を表す動詞が現れている。これに対して、原点より左側には端っこに「読む」がありその右に「面白い」、さらに右に「知る」が見える。以上のことから、平面の右半分は感覚の領域であり、左半分は認識の領域であると見て間違いはなさそうである。

では、上半分と下半分はどのように考えられるだろうか。いちばん上に「婆さん」があり、その下に「嬢」がある。また、下半分には「老人」、「久一」、「和尚」が並んでいる。これだけ見ると女性と男性の領域分けと見ることもできそうだが、左下には「男」と「女」が共に並んでいる。だから、どうもそうではない。

あらためて、平面の上半分と下半分の語彙を比べてみよう。そうすると上半分には「自分」、「画」、「詩」などの語が並んである。これは主人公に関わりの深い語彙である。だから、上半分は主人公の主観の世界であることがわかるのである。「婆さん」や「嬢」も主人公の主観とのか関わりの深さから登場しているということである。

下半分には既に見た「老人」、「久一」、「和尚」の他に「音」や「色」といった語が現れている。「音」や「色」は知覚であると同時に客観世界の現象である。だから、平面の下半分は客観の領域であり、人間に関して言えば他者の領域だということである。

そうすると下半分になぜ「吾」や「画工」が現れているのかという疑問が生じる。「吾」に関しては前章で見たように「吾」が他者の声を聞き、姿を見て他者を「知る」からである。また、「画工」と並んで「坊主」の語もある。これらは職業の呼称である。もちろん、自分が「画工」なのだが、それは自分を客観的に見て職業で表現したものなのである。

こうして図 3 の縦軸と横軸で反時計回りに、主観・知覚の第 1 象限、主観・認識の第 2 象限、客観・認識の第 3 象限、客観・知覚の第 4 象限という区分になることがわかる。『草枕』の各章はこうした四つの世界を行ったり来たりしながら進行していく。

注目すべきは最初の一が第 2 象限にあり、最後の十三が第 4 象限にあることだ。つまり、『草枕』は主観・認識という重苦しい閉鎖的な世界から始まって客観・知覚という、開かれた明るい世界で終わっているのである。それが意味するのは、『草枕』という小説が、頭でっかちで少し偏屈な主人公が、那古井の人々との触れ合いを通して他者と触れ合い自分を解放していく物語の構造を持っていることに他ならない。

おわりに

『草枕』の主人公が用いる特徴的な語彙として「非人情」がある。また、東京出身で東京から熊本にやってきた主人公にとって、「東京」は人々と主人公を区別する象徴的な概念である。つまり、主人公は小説の中で「東京」者という刻印を押され、偏屈に「非人情」にこだわる人間として登場している。

だが、本稿の分析で見てきたように、そうした主人公が地元の人々と交流することで徐々

にこだわりから解放されていくことが『草枕』という小説の構造になっている。そのときに解放の触媒としての役割を果たすのが那美である。彼女自身も主人公との交流のなかで「非人情」という言葉を口にし、主人公とやり取りしたりする。しかし、彼女は情の側の使者として主人公を翻弄する。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい（一)」という冒頭の文章は有名であるだけでなく、『草枕』という小説の構造を明快に示していた。前章で見たように「智」つまり主観・認識の世界の住人としては他者と上手くやっていきにくい。だからと言って、主人公は客観・知覚の世界に移って他者の間にたゆたうことに恐れを抱いている。それでは流されてしまうだろうと思うのである。そして、東京にいても地方に行ってもこの世は住みにくいと思っているのである。

このように意地っ張りの主人公の肩肘張った生き方に那美はズケズケと足を踏み入れてくる。その行動に主人公は翻弄されつつも、最後は他者と自分とを折り合わせる地点を見出していくのである。

「『それだ！　それだ！　それが出れば画になりますよ』と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った（十三)」という末尾の一文は、小説の最期に主人公の解放が成った状況を示している。だから、『草枕』は文人趣味の軽い戯作小説ではなく、近代小説としての完全な構造を有していると言えるのである。

主観と他者の折り合いは『草枕』の主人公に限らず、明治以降の近代日本知識人が抱えた最大の難問であった。とりわけ、漱石その人が留学経験などでこの重圧に圧し潰されそうになっていて、それを乗り越えるために小説家になった。だからこそ彼の作品は近代日本人の共感を呼び読まれてきたのである。

東京の知識人と地方の知識人では自ずとその在り方や悩み方には違いがあったであろう。しかし、熊本は自由民権運動が盛んに行われた地である。その担い手の一人も小説には「志保田の隠居」として登場している。

『草枕』ではそうした地方地主層による知的抵抗が一段落した明治末期の地方情勢や東京・地方関係が描かれていることにも、また、歴史的価値があるのである。